平成２０年度後学期　学生による授業評価アンケート調査（最終）

「アンケート結果に応えて」

所属部局	人文学部		氏　　名	森本隆子	
講義コード	２３３１００５０１０		講義名	日本文学概論(後期担当分)	
開講曜日	火曜日	５・６時限	専門科目		
授業回数	15回	休講回数　０回	補講回数　０回	受講登録者数	２５人

成績評価に際し注意した事項

最終レポートに発揮された実力を評価しながら、毎時の学習の積み重ねも重視した。

報告内容

今回の授業および授業アンケートについては、そもそも登録者２５名の少人数講座、アンケート提出者も２４名（但し、この２４名には研究生や単位抜きの聴講生なども含むため、２５名の登録者とは多少、ズレてはいるのですが）と授業に対する取り組みは終始、積極的で意欲も高く、これらの背景を反映してか、アンケート各項目の数値は、私にとっては暖かいものでした。

満足度系統の「１３　新知識」(８.０)「１４　総合的満足」(７.８)「１５　他の学生や後輩への推薦」(７.６)、対受講生スタンスの可否を問う「９　質問や相談に応じる」(８.０)「８　公平」(７.８)「１０　秩序」(７.６)などを中心に、８項目は７.５を上回りました。

しかし、逆に７.０未満となってしまった３つの項目については、「２　板書」(５.５)「３　教材の使い方」(６.７)の授業技術の巧拙、「５　授業開始終了時刻」(６.８) の教授マナーなど、授業展開の基本に関わるものばかりであり、大いに反省されるところです。

特に、これまで経験したことのない「３　教材の使い方」のマイナス評価については、具体的には、すでに中間アンケート記述欄において注意喚起のあった「プリント資料は数は多いが興味深いものばかりなのに、授業中に触れる余裕のないまま使い残されていく」に由来するものと推察します。今回の後期・日本文学概論は、日本近現代文学の「展開の特質と限界」を、＜教養小説―自我の成長・性的成熟＞という観点から概括することを目的としたため、扱う素材も明治の漱石、鴎外から現在進行形の春樹、江国、ジブリと多数多様であり、１つ１つを可能な限り深く的確に洗い出しながら流れも追いたいという欲張りなコンセプトが、資料は豊かに多目＝最低限の説明と使い残し、の結果を招いてしまいました。資料関係については、中間・最終両アンケートにわたって、「プリントの資料紹介は知らなかったものばかりで興味深い」「役に立つので続けてほしい」「参考になる」「たくさん読んで知識が身についた」等の待望の声と、「配った資料がじゅうぶんに説明されない」「使われない資料がある」等の苦情とが、表裏一体の関係で出され続けており、同じく自由記述欄で指摘のあった「授業のテンポが少々、早すぎる」点と相俟って、対象作品、テーマの「品数」が過多になっていることに猛省を促されます。学期の中途より、詳しい説明は欠くことになっても、最低、紹介の役を果たしさえすればと、プリントには多目の資料掲載の継続を決断したことの弊であり、当然、終了時刻が休憩時間に割り込むという悪循環にも陥りがちでした。

また、「３　教材の使い方」はカルテでは第３象限に属するものですが、今回のアンケート結果が示す最大の課題は、受講学生たちにとって重要度が高いにも拘らず満足度が低いことを示す第４象限に、「４　主題・テーマの明確さ」(７.０)が入ってしまっていることです。「１４　総合的満足」の数値自体は高かったため、項目４に関する回答数値の分布を見てみたところ、A―１４名（A内の分布ではプラスからマイナスへ７，３，４）、B－９名（４，５、０）、C―1名（１、０、０）であり、高い方から低い方まで分布が連なる結果となっており、上述の現象から類推するところ、おそらくは、対象作品から参考資料に至るまで素材過多なプログラムが、消化不良気味ではあれ、関心興味は刺激された受講者と、拒否的になってしまった受講者の両極を生み出してしまったようです。各回に頂戴したコメントを活かして授業内容を掘り下げ、豊かにする努力と平行して、授業内容の精選、精錬に努めたいと念じます。